



**赤谷の森のモニタリング活動
第1回(自然林復元試験地)**

赤谷プロジェクトでは生物多様性の復元を目的に、スギなどの人工林の一部を積極的に自然林に戻す試験を行っています。植栽などの方法に頼らず、自然の活力を活かし自然林へと誘導するには、人工林をどのように伐採するのが効率的なのか、いくつか試験地を設けて検証しています。

1 これまでの試験でわかってきたこと

- (1) これまでの試験の結果からは、1回の間伐では自然木の進入は難しいこと。
 - (2) 20㍃程度の皆伐では、多くの若木が発生するが、成長が思わしくないこと。
 - (3) 40㍃程度の皆伐では、若木の数は少ないが、成長が良いことなどがわかってきました。
- また、既存の人工林200箇所以上の植生等を詳細に調査したところ、自然林への誘導のしやすさは、種子を供給できる自然林からの距離と、人工林になる前の土地の利用状況(自然林、人工林又は

2 新しい伐採試験地

採草地)が強く作用することわかってきています。

これまでの試験でわかったことを元に、平成23年に大規模な新しい伐採試験地を設定しました。(イメージ図参照)



新しい伐採試験地イメージ図

対象としたのは林内にほとんど自然木の進入がないスギ人工林、さらにこの人工林の一部は元々草地であったところに植栽したことがわかっており、本来そこに生育すべき種類の植物が少なく、自然林への誘導が最も難しいと予想されました。

ここでは、3種類の試験地を設定しました。

- (1) 自然林からの距離と種子供給との関係を明らかにするため、成熟した自然林に隣接した皆伐試験地①延長約200㍃幅約20



伐採試験地40m×200m

㍃及び②同延長で幅約40㍃をそれぞれ設定

(2) 人工林造成以前は草地であった(1)の試験地と比較するため、人工林造成以前に自然林だった隣接箇所に皆伐試験地、③延長約100㍃幅約20㍃を2箇所設定

(3) その他に自然林から遠い場所に、僅かに進入していた自然木を伐採せず残した場合と全て伐採した場合の自然木の発生を比較するための試験地④を設定

今後は自然木の発生の様子は勿論、鳥や動物、昆虫の利用状況の変化等様々な角度から継続的にモニタリングを行っていくこととしています。

これらの調査結果を評価することにより、自然林への誘導が難しいと予想される場所における課題を洗い出し、他の場所でも活用できるように伐採の方法を探っていきたくと考えています。

赤谷の森自然散策の実施
<http://www.jpfnaff.go.jp/kanto/akaya/bos201202.html>

2月19日(日)群馬県みなかみ町(赤谷の森)で冬の森林・冬芽と動物のフィールドサインの観察会を行いました。

午前は、冬芽の観察で、森林土壌や植物の専門家である長島成和さんを講師に招き、図鑑やルーペなどを使い、冬芽の特徴から樹種を見分ける方法を学びました。

午後は、赤谷センターの職員がプロジェクトを使用して動物の足跡の特徴を説明した後、スノーシューを履いて雪上にある動物の足跡の観察を行いました。

当日は天候にも恵まれ、ウサギやイノシシなどの足跡が点々と続いており、参加者の皆さんは興味深く観察しながらその足跡から動物の生活に想像をふくらませていました。



これは何の足跡かな？
キツネ？それともタヌキ？